

ヒシクイ (Anser fabalis) 保護のための教育・宣伝活動

雁を保護する会

池内俊雄

宮林泰彦

1. はじめに

私たち「雁を保護する会」は日本へ渡来するガン類の保護を軸とした活動を行っている。かつては各地で普通に見られ、日本人となじみが深かったガンだが、現在ではその生息地の多くが失われ、限られた場所でしか見られない特殊な鳥になってしまった。当会ではこれらの天然記念物でもあるガンとその残された生息地を保護しつつ、将来は再び各地にガンを呼び戻したいという願望を持っている。わが国に渡来するガンのうち、本報告では現在活動の中心に据えている1種「ヒシクイ (Anser fabalis)」に関する活動について報告する。

ガンとその生息地を保護するためにはその生態、とりわけ移動のコースや繁殖地を解明することが不可欠である。当会ではカムチャッカの研究者と共同で首環を用いた標識調査を行っており、その過程でカムチャッカに生息するオオヒシクイ (A. f. middendorfi) とヒシクイ (A. f. serrirostris) の2亜種が多数日本へ渡来することを突き止め、国内での渡りコースについても多くの知見を得つつある。これらの知見をヒシクイの保護を考える際の貴重な資料とし、かつそれらを用いてオオヒシクイ等の生息地の持つ価値や渡りのコースについて広く一般の人々に理解してもらうための教育・宣伝活動も行なっている。特に、既に小中学生を含む広範な人々の参加を得ている「雁の里親」運動をその軸に据え、よりいっそう多くの人々にガンに対する関心を深めてもらい、それを保護運動の基盤にして行きたい。

2. 活動報告

(1) 調査活動

当会で準備した首環をソ連カムチャッカ州のグラスモフ博士に送付し、1989年7月に同州にて同博士によってヒシクイ80羽とオオヒシクイ64羽に装着された。これらのガン

は前年までに首環標識されたガンとともに、全国各地に在住する会員および協力者によって多数が観察され、その回数は89/90年度冬期に3,394回にのぼった。

首環標識鳥の調査に加えて、全国の主要なガン渡来地において10月から4月にかけて毎月1回統一調査日を設けて、2亜種の生息個体数の調査を行なった。調査結果は現在とりまとめ中である。

(2) 『雁よ再び関東へ』第2回雁の里親の集い開催

89年9月30日に埼玉県伊佐沼で、翌10月1日に東京にて、それぞれ「雁と白鳥を呼び戻す市民の会」及び(財)埼玉県野鳥の会と、日本野鳥の会茨城支部との共催で開き(両日の参加者は74名と43名)、かつてのガンの最大の越冬地である関東平野にガンを再び呼び戻そうとアピールを採択した。さらに現在では関東唯一となってしまったガン(オオヒシクイ)の越冬地である霞ヶ浦に隣接する小野川河口付近を鳥獣保護区に設定されるよう、要望書を採択し、後日茨城県庁に提出した。

(3) 第6回ガンのシンポジウム開催

89年11月25、26日に新潟県豊栄市博物館にてソ連カムチャッカ州の共同研究者ゲラシモフ博士を招いて、《日本海側におけるガン類の渡来状況及び越冬生態》というテーマで開催した。福島潟野鳥の会、野生生物情報センターとの共催で、約100名の参加を得た。初日にゲラシモフ博士による特別講演と日本海側各地からの報告が行なわれるとともに、日本海側で最大の越冬地である福島潟の保全を訴える要望書を採択した。要望書は後日、関係諸機関に送付した。2日目は参加者一同で福島潟に越冬するガンを観察した。

(4) ゲラシモフ博士の講演会開催

第6回ガンのシンポジウムに続いて、仙台市東北大学文学部(11月26日)と宮城県若柳町(11月27日)にて、ゲラシモフ博士の講演会を開催した。第6回ガンのシンポジウムの全講演要旨及びゲラシモフ博士の講演要旨は1990年7月に「ワイルドライフ・レポート(野生生物情報センター)」No.11に掲載された。

3. 「雁の里親」運動

当会の調査活動の基幹をなす日ソ共同の標識調査を、主に経済面から支援しているのが「里親」と呼ばれる方々で、雁を保護する会の会員には勿論、新聞や雑誌・ラジオなどで

も広く全国に呼びかけて、今までにのべ1,700人の方々から協力をいただいている。このキャンペーンは今期で第5期を迎えた。里親制度とは次のようなシステムである。

ゲラシモフ博士に送る首環を1個1,000円以上で買い上げてもらい、希望の番号を選ぶ。それと同じ番号が刻印された首環を付けた「ヒックイ」と名目上の親子関係を結び（＝里子）好みの愛称をつけてもらう。例えば、ガンモ・ニルス・ゴルバチョフなどである。全国各地に100人以上いる観察者によって、里子の飛来が確認されると、初めて発見された場所と日付が事務局より『発見 News』として絵はがきで里親の手元に届く仕組みになっている。更に「ヒックイ」が全て北に帰った後で、1シーズン中の標識鳥の全データが整理されて印刷物になり郵送されてくる。これらの情報を地図で追えば、雁の渡りのコースや越冬地での動向を家にいながら把握することができ、忙しくてフィールドに出る余裕のない人や雁の見られない地域の人にも、身近な存在に感じられる利点がある。又『発見 News』をもとに、里子との対面も可能で、既に10人以上が実現している。単に首環代を負担して終わり、というのではなく、我が子への愛着を通して広く鳥や自然環境そのものに関心を高めていけるところに、このシステムならではの魅力がひそんでいる。

今期はこの特徴を有効に発揮しようと、小中学校への働きかけも積極的に行なった。それは一時の金銭的な援助にとどまらず、現在教育現場で重視され始めた環境教育の導入口として、かつては広く日本に分布していた雁類は格好の題材だからである。幸い小学校の高学年では「大造じいさんと雁」や「かりがわたる」などでその名を耳にしている児童が多く、テレビアニメでもお馴染みなだけに反応はよい。熱心に耳を傾ける真摯な態度に、バランスのとれた感性豊かな日本人に育てて欲しいと願わずにはいられない。天津市立瀬田南小学校・宮城県亙理町立亙理小学校・港区立鞆絵小学校など学校全体で参加している団体があり、児童・生徒は里親の半数に達する。

このように、里親キャンペーンは平行して雁類の普及・啓蒙活動も推しすすめ、精神的援助の性格が比重を増しつつある。そして、この精神的援助——私達自身どう暮らすかが、将来を長い目を見たときに、雁類の生息地保全に最も必要だと確信している。

4. これからの活動

(1) 水鳥に多数発生し始めた鉛中毒への対応

1989年春、繁殖地への北上を始めたハクチョウ類が、その中継地である北海道の宮島

沼で30羽余りも鉛製の散弾を摂取したことによる鉛中毒で死亡する事件が起こった。本会では他の自然保護団体と協力して要望書を提出するなど対応したが、1990年春にはハクチョウだけでなくガンの1種である「マガン」にまで発生し、その数はハクチョウをはるかに上回り、69羽が鉛中毒で死亡した。さまざまな対応策が考えられ、また行政によって実施されているが根本的な対策として散弾を鉛製から無毒な素材のものに変更することである。今後広く世間に訴え、鉛弾の廃絶を実現したい。

(2) ガンの渡来地を広げる活動

1989年度は『雁よ再び関東へ』第2回雁の里親の集いを関東で開催したが、次年度は第7回ガンのシンポジウムを茨城県で開催する予定である。これをてこに関東へガンを呼び戻す運動をさらに活発にしてゆきたい。

一方、現在の近畿地方では琵琶湖北部がガンの渡来地の南限である。しかし、かつては近畿地方にも広く、多数のガンが渡来していたことがわかっており、これら地域へもガンを呼び戻そうとする活動をこれから展開してゆきたい。

(3) 首環による標識調査活動の拡大 —— 国際共同研究、国際協力の広がり ——

次年度にはソ連のマガダン州の州都マガダんで、ソ連科学アカデミー北方生物問題研究所主催による『北アジアにおけるガン類個体群』に関する国際シンポジウムが開かれることになっており、当会も参加してカムチャッカとの共同研究の成果を発表する予定である。そして、このシンポジウムをきっかけに首環による標識調査をアジア各地で実施し、各国が協力してこれら標識鳥を追跡するべくネットワーク化することが期待される。これが実現の方向に進めば、アジア地域全体のなかで日本のガン類を位置付けすることができるようになり、かつガン類の生息地の保全を各国が協力して進めていくことができるようになるものと考えられる。

ヒシクイ飛来ルート判明

日ソ研究者
共同で調査

保護目指して 進む国際協力

カムチャツカ南部

北海道東部

伊豆沼・化女沼



今年もカムチャツカに送られた保護用のツラネツラネ製種鳥
|| 若柳川南の異地正行宅で

毎年冬に国内へ渡って来るガンのよるをカムチャツカ南部「雁がん」を保護する会（仙台市、横田養会長）が昨年行ったガンの保護調査で、国内で越冬するガンの一種のヒシクイは、カムチャツカ南部から北海道東部を中継して飛んで来る事が分かった。調査はソ連の研究者と共同で実施。これまでに、同じガンの一種のオオヒシクイの研究でも成果を上げており、不明なヒシクイが多いガンの飛来ルートを探索する国際協力の研究がまた一歩前進した。

ガンの保護調査は、昭和五十九年からソ連科学アカデミーのニコライ・ゴシモフ博士（カムチャツカ）と共同で始めた。ヒシクイはカムチャツカと北海道、突然と北の国からやって来るという事から分かったガンのルートを具体的に解明する。しかし、国内で多く見られるヒシクイについては、カムチャツカ西部で保護をせられた鳥が、日本ではほとんど見つからず、そのルートを確かめられないというのがこの調査の目的。

オオヒシクイについては、六十年までの調査で、カムチャツカ西部中部で育ったヒシクイ三十四羽（ほかにもヒシクイ）が、日本ではほとんど見つからず、そのルートを確かめられないというのがこの調査の目的。

ツカで撃ち落されたことが分かっており、日本の狩猟者は一〇〇％。

三十三羽が保護されたのは延べ三十四十回。場所は、昨年九月から十月にかけては北海道網走市の祝津町や根室市の風通町、十一月から今年一月までの越冬地は東部の伊豆沼周辺の北部や化女沼など大滝地方がほとんど。この結果をまとめた。カムチャツカ南部のヒシクイは北海道東部から保護に送られてくることになった。

調査は今年も引き続き保護調査を予定し、保護用のツラネツラネ製の産卵をケシモフ博士に送った。同会事務局長の異地正行さん、若柳川南さんは「昨年の道中でヒシクイの調査を始めた。また、オオヒシクイについても保護調査することや今後の生態やカムチャツカから北海道に渡ってくるまでのルートの研究も深めた」と話す。

また、昨年暮れ、日ソ間の鳥条約が批准されたことで「鳥の保護に大きな力を発揮する」とが期待される。今後は研究者の相互間の入れも実現させ、本道の保護の共同研究にしたい（異地正行）としている。今年冬に、まずケシモフ博士を日本へ招く方向で交渉している。

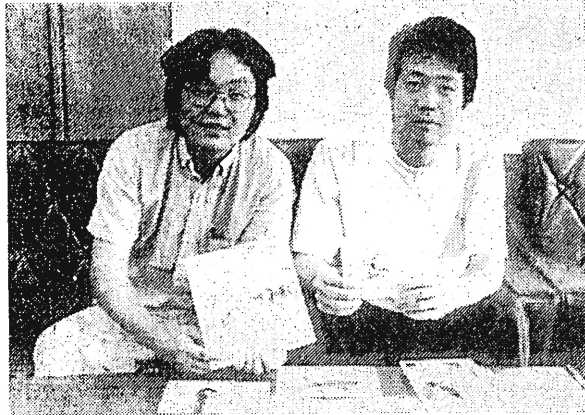
1989年 8月28日 朝日新聞
ヒシクイ飛来ルート判明

「雁よ 川越に戻っておいで」

あす伊佐沼へりて集会

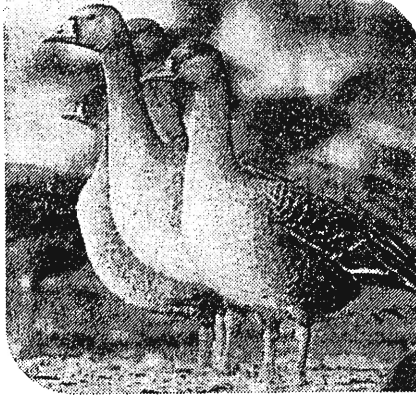
「川越市民の会」など三団体

「雁(かり)よ、伊佐沼に 文会長」と「雁と白鳥を呼び戻す会」—— 県野鳥 戻す川越市民の会 (笠原啓の会(本部・大宮市、池谷泰一会長)、「雁を保護する全



「雁よ、カムバック」と、呼びかける池内俊雄さんと須水・県野鳥の会研究部長(左)

国の会(本部、仙台市)のつた。このため全国の愛鳥家三団体は二十日、川越市東部の伊佐沼へりて「雁よ再び戻東へ・伊佐沼の集い」を開。雁はかつて東北、関東など全園に飛来したが、昭和四十年代から関東周辺では影をひそめ、県内最大の飛来地であった伊佐沼も姿が見えなくな



国から天然記念物指定も受けているマガ

で日本への飛来鳥はマガ、ヒシクイなど八種類。特にマガンは、体長七十センチ、胸翼長は約一五センチもあり成鳥はひなが真っ白。秋にシベリアから渡来、翌年五月ごろ北へ帰るが斜めに群れをなして飛ぶ。雁行は昔から有名。日本には北海道、東北をはじめ関東、北陸から山陰とほぼ全国に分布したが全国的な開発ラッシュで激減、昭和四十年代後半以降、関東地域にはほとんど来ていない。特に川越の伊佐沼は約二四キロの広さで昔から県内唯一の飛来地で知られ、旧川越城は初雁城」とまで呼ばれていたが、最近では「迷い雁」が時々まよってくる程度。

そこで約二十年前に「雁を保護する会」が全国組織として発足、国に働きかけ雁の園天然記念物指定(昭和四十六年)を勝ち取り保護運動を展開。さらに五年前からはソ連のカムバック半島などで雁に首領をつけ保護運動を続けるソ連の学者とタイアップして「雁の里親運動」をスタート、昨年は北海道、東北などを中心に約二万二千羽の飛来を記録した。

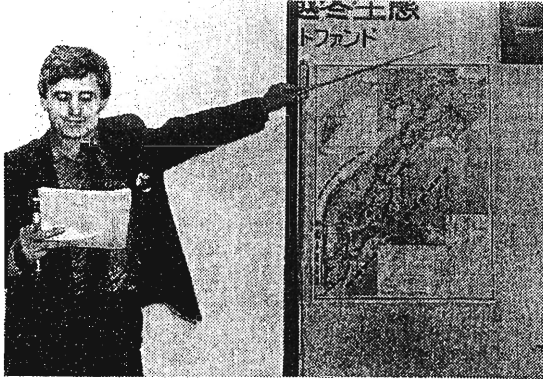
「伊佐沼の集い」は関東に雁をよび戻す運動のトップバッターで、国民年金保険センター「むさし」での講演会

と伊佐沼の実地見学などを行うが、この際「雁を保護する全国の会」(約八百人)から新たに分離する形で全国組織の「雁の里親の会」が発足する。「伊佐沼の集い」に続き十月一日は東京・池袋の立教大で「千葉県北部の集い」も予定され、長瀬川遊水池や霞ヶ浦など関東一帯に「雁カムバック運動」を展開する予定。

「友の会」は事務局を大宮市東門前二八、写真家池内俊雄さん三〇方に置くが池内さんは「雁にはねらるの水辺と水田などの広い後背地が欠かれないが、伊佐沼は一年前から環境整備がすすられ雁よび戻しの最適地」と話している。問い合わせは県野鳥の会(048・645・0570)。

1989年9月24日 毎日新聞
「雁よ 川越に戻っておいで」

野鳥ガン保護の道探る



全国の愛鳥家 豊栄でシンポ

またヒシクイ越冬地の本県や北陸地方、琵琶湖などの各研究者による生態発表も行われた。

さらに土砂流入による陸地化と環境破壊が続く福島湾について①湿地生態系を守るため水位保全を図る②大規模放水路工事による自然破壊を防ぐ③福島湾、鳥屋野潟をはじめ飛来地湖沼の国際的登録湿地指定を求める④のアピールと提言が全員一致で採択された。

きよう二十六日は福島湾・鳥屋野潟で野鳥観察会が予定されている。

写真・研究成果を講演するゲランシモフ博士

福島潟保全アピール

わが国に飛来する野鳥の雁(がん)類について、全国の愛鳥家が調査研究の発表と、保護の道を探る「第六回カンシンボシウム」が、二十五日豊栄市で開かれた。愛好者の組織である雁を保護する会と、大野雁・オオヒシクイの日本最大の越冬地、豊栄市の福島潟を観測拠地に昨年十月発足した「福島潟野鳥の会」などの主催で、本県では初めての開催。

シンボシウムは葛塚東小学校特別教室を会場に、北海道から山口県まで県外の三十人を含む百三人の野鳥愛好者が参加。

まず雁を保護する会の奥地正行事務局長が「雁の飛来数は近年増加しており喜ばしい。ヒシクイに限れば近年わたりのルート解明が着々進みつつあり、大越冬地福島潟の貴重な環境を今後も守り続けることが大切だ」と基調報告した。

続いてカムチャッカ半島で野鳥の研究に取り組み、日本の研究者と共同で福島潟や宮城県伊豆沼に冬季飛来するヒシクイの夏季の生息地が同半島であることを確認、今回その研究成果発表などのため来日したソ連科学アカデミーのN・ゲランシモフ博士がソ連での研究の実態について特別講

1989年11月26日 新潟日報
野鳥ガンの保護の道探る



宮城県古川市でヒシクイを観察する
ゲランモフ博士 1989年11月27日



第6回ガンのシンポジウム 2日目の
福島潟における観察会 1989年11月26日



『雁よ再び関東へ』
第2回雁の里親の集いにて（川越市）
1989年9月30日



マコベツコエ湖（カムチャッカ）における
ヒシクイの標識調査 1989年7月15日